

「患難の中で消えなかったもの」

エシミア書

テサロニケ人への第一の手紙

第15章 16節

第1章 1節～10節

説教 本庄侑子 伝道師

テサロニケ人への手紙は、パウロがテサロニケ教会に送った手紙です。テサロニケに教会を建てて間もない頃、ユダヤ人たちが起こした騒動により町から出て行かなくてはならなくなったパウロは、テモテを送って様子を伺いました。すると、彼らは信仰を失うことなく、かえってパウロのために祈り、会いたがっているということです。それを聞いたパウロは、この手紙を記して送り届けてもらいました。

この時、テサロニケ教会もパウロも、あらゆる患難の中にありました。しかし、パウロの目に立ち上がってきたのは、その中でなお、「神に愛されている」(4節)という事実でした。

そして見たのは「父なる神と主イエス・キリストとにあるテサロニケ人たちの教会」(1節)でした。彼らは、パウロとの関係によってのみ立っていたのではなかった。だからこそ、パウロが去った後も、患難が続いても、立ち続けたのです。そしてその上で、パウロのことを祈りに覚え、会いたいと願っていました。教会は、兄弟姉妹同士を、父なる神と子なるキリストとの間にある深い絆で結び合わせるのでしょう。患難に囲まれても、遠く離れざるをえなくても、死によってでさえも解くことのできない、揺るぎない教会の絆があるのです。

パウロはさらに、「信仰の働き」「愛の労苦」「望みの忍耐」(3節)を見ていました。「信仰・愛・望み」だけ聞くと、「信仰と希望と愛」(コリント人への第一の手紙第13章13節)を思い出します。しかしパウロが見たのは、それらが「働き・労苦・忍耐」と一つになっている教会の生き方でした。

テサロニケ教会に「わたしたちと主とになろう」(6節)、つまり、主イエスに似た「信仰の働き」や「愛の労苦」が生まれていました。その始まりには、「多くの患難の中で、聖霊による喜びをもって御言を受け入れ」(6節)る姿がありました。

テサロニケ教会は今に限らず、はるか以前から、多くの患難の中にあつたのです。彼らの多くは貴婦人でした。何不自由なく生活する優雅な人々に思えます。しかし実のところ、世ののかなさ、人の醜さを嫌というほど味わう立場だったのではないのでしょうか。富と権力の浮き沈みや親族間の争いの中で、何かが起これば弱

い立場の自分に火の粉がふりかかってくる。そんな世界に生きてきた人々でした。

そこに突然パウロが現れ、福音を伝えたのです。彼女たちの耳に、これまで聞いたことのない新しい言葉が聞こえてきたことでしょう。冷たく閉ざされた心に愛の息が吹き込んできて、ずっと押さえつけてきた叫びに主イエスが触れてくださいました。彼女たちは、社会や家族のひずみの中でずっと叫んできました。私のことを物言わぬ飾りとしてではなく、人として向き合ってくれる人はいないのか。私のことを真剣に考え、行動してくれる人はいないのか。そんな彼女たちの叫びを神は聴いておられた。そして、パウロを遣わして伝えたのです。私がいる。あなたには私がいるのだ、と。

私も16歳の時、この方と出会いました。洗礼を受け、古い自分は死んで、神の前で新しい自分が歩み始めました。その後も患難は続きました。私自身も相変わらず罪深い言動を繰り返します。しかし、罪という究極の患難の中にあつて、主の日ごとに礼拝へと招かれ、愛の息を吹き入れられ、私を愛して下さる方の声が聞こえてきて、聖餐において愛を味わい知り、主イエスに似た生き方へと送り出されてきました。

テサロニケの貴婦人たちも同じ教会で生きていました。指導者が去っても、患難の中にあつても、聖霊を受け、御言葉と聖餐とを通して独特の生き方に導かれていました。汗を流し、血を流すほどの苦しみを伴いながらも、なお、わが体を使って相手のために生きていたのです。

それらを支えたのは「私たちの主イエス・キリストに対する望み」(3節)でした。「イエスが、天から下ってこられる」(10節)という望みです。教会の望みは主イエスの再臨にあります。信仰の働きや愛の労苦が踏みにじられるように思えても、望みを捨てなくていい。終わりの日、主イエスが必ず完成させてくださるからです。

患難の中で消えなかったものがあります。望みを失わず、愛するという生き方です。罪に引きちぎられた世界と人々を癒す、教会の生き方があるのです。主は言われます。あなたには私がいる。あなたに新しい家族を与える。ここで生きよ。私が再びこの地に来る日まで、全てを私に委ねて愛し続けよ、と。

(記 本庄侑子)